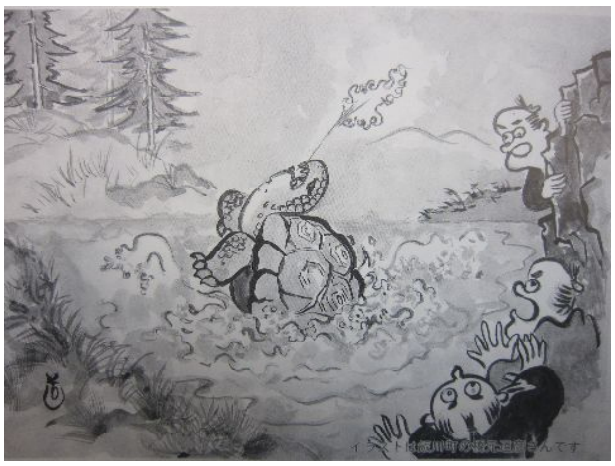
ふるさとの民話（第四十二話）



『松の池の”めいしろ”』

飯川の光善寺に、寺小屋があった頃のお話です。

白馬村の子どもも、その寺小屋へ通っておりました。手習いやソロバンが終わっても、子どもたちは、遊んでいて、すぐに、帰ろうとしませんでした。

その度に、寺の法印さまが、「早う、帰れや。暗くなると、松の池から”めいしろ”が出て、池の中へひっぱり込むぞや。」と、いいました。すると、子どもたちは、あわてて、家路に着きました。

家に帰ると、「お父う、お母あ、”めいしろ”とは、なんや。」と、白馬の子どもたちは、法印さまが言った松の池の”めいしろ”のことを、しつこく、聞きました。「”めいしろ”とは、怖いもんじゃ。池のそばへよるんじゃないぞ。」と、子どもたちにいいました。しかし、その実、村の人たちも、”めいしろ”の正体が、何であるかを知らなかったのです。

そこで、村の人たちは、正体を見とどけようとしました。三日三晩、交替で池を見はっていました。すると、松の池の真ん中に、なんと、ムシロ一枚ほどもある大亀が、浮いて出てきたといいます。

「めいしろ」とは、「めいしり、めめしり」等、近在で、いろいろな呼び方をされています。それは、「人間の腹の臓を喰うもの」といわれ、池のそばへ、子どもを近づけないための「いましめ」ことばです。

たまたま、松の池を見張っていたら、大亀が出てきたが、他の川や池では、違うものであったかもしれません。また、「めいしろ」とは、架空の動物であったとも思われます。

→